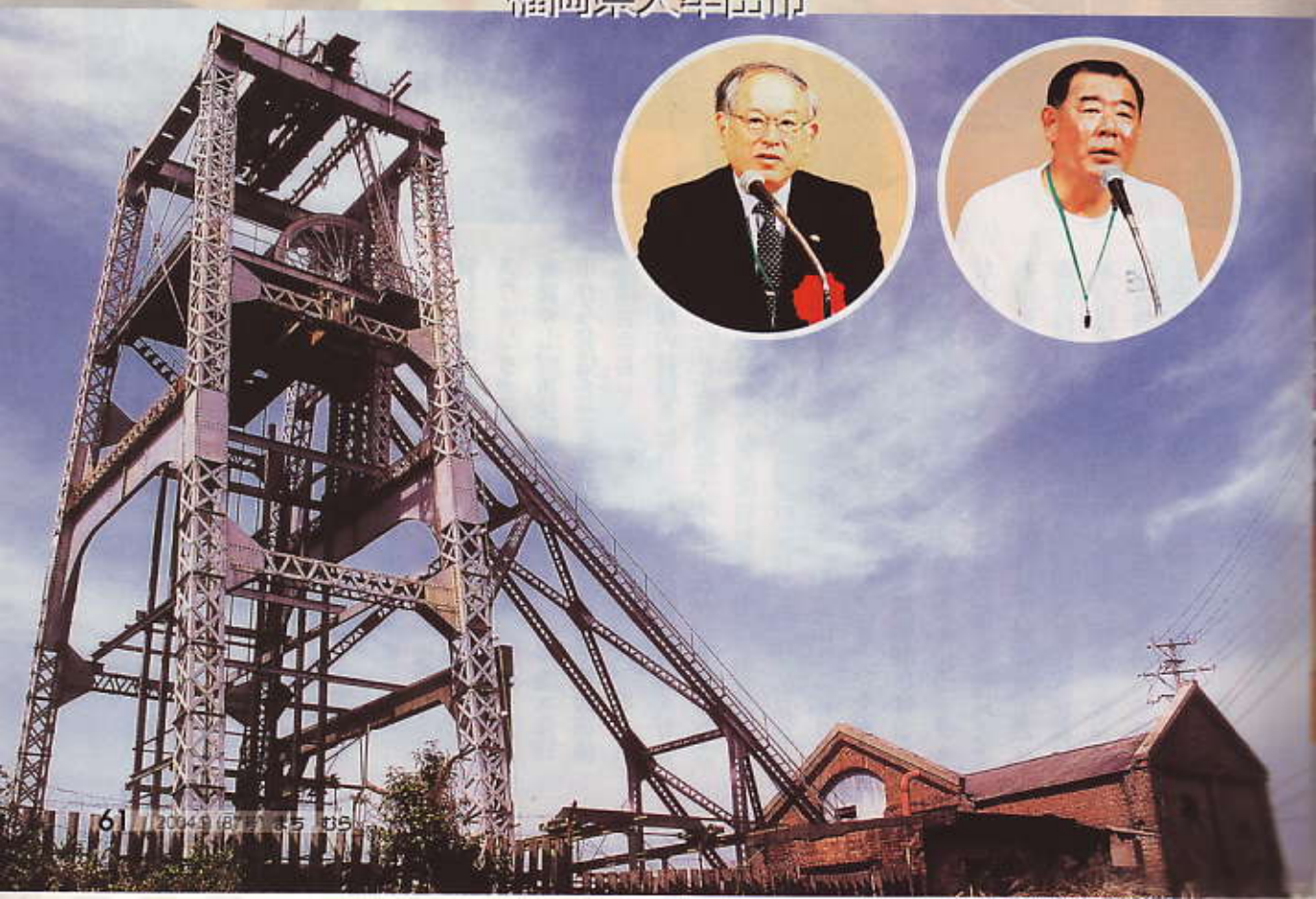
写真紹介

環境と歴史のコラボレーション
実践！ 市民憲章運動

市民憲章運動推進 第39回全国大会

福岡県大牟田市



「環境と歴史のコラボレーション―実践！市民憲章運動―」を大会テーマにした市民憲章運動推進第三十九回全国大会が、七月二十三日から二十五日の三日間にわたり、福岡県大牟田市の文化会館などを会場として、北は北海道釧路市から、南は沖縄県石垣市までの市民憲章運動関係者や地元市民、総勢千人の参加を得て開催された。

全国高等学校選抜吹奏楽大会で、優秀賞を受賞したという大牟田高等学校吹奏楽部の軽快なスウィングで幕を開けた大会は、「まちの歴史を活かし、市民憲章運動のまちづくりを大牟田市から発信を」と永松均全国市民憲章運動連絡協議会会長が、「全国各地で取り組んでおられる皆様の経験を語り合い、本市のまちづくりの一助に」と古賀道雄大牟田市長が、それぞれ力強くあいさつをした開会行事のあと、引き続き、記念講演や事例発表が行なわれた。

ここで注目を浴びたのは、大牟田市の「こえの博物館」の事業紹介。ご存知のように大牟田市は石炭のまちとして栄えた。最盛期には日本の石炭産出量の六分の一を占めたという。そんな大牟田市が、この石炭産業の歴史を市民とともに映像として後世に残す作業を始めた。最先端の技術が導入され、全国から大勢の人が集まり、隆盛を極めた石炭産業だが、反面、戦前の囚人労働、強制連行、戦後の三池争議、さらには炭じん爆発事故などのいわば「負の遺産」と呼ばれる面もあった。市では、これらも直視し

映像に残そうと四本の映画にまとめた。監督とカメラマンこそは専門家に依頼したものの、歴史の証言者を探し出し、取材依頼、撮影現場の手配、資料調査などは、大牟田市石炭産業科学館が行なった。そして、戦時中に捕虜となり、炭鉱で過酷な作業をさせられたアメリカ人へのインタビューをはじめ百人に取材を敢行。宮原坑跡や三池港など近代遺産の映像とあいまっての証言録は日本近代化の一断面を垣間見せてくれる。この「自治体がまちの歴史と向き合い、記録映像として残す」という全国でもあまり例のない取り組みは、高い評価を得、全国広報コンクール映像の部において総務大臣賞なども受賞している。当日は、その一つ『炭鉱電車の走るまち』が上映され、聴衆に大きな感動を与えた。

ほかに記念講演としては、大分県宇目町役場職員で「観光大使」の辞令をもらい全国を飛び回っている矢野大和氏が、また、事例発表としては、市内四つの小・中学校の児童、生徒による河川浄化に関する取り組み発表が行なわれた。

最後に、市民憲章運動による「人づくりのまちづくり」を進めていくこと誓った大会宣言を採択して終了したが、参加者は、同日に開催されている大牟田市の夏の一大イベント「大蛇山まつり」の一万人の総踊りに参加した。

次年度の全国大会は、徳島県徳島市で開催されることが、同時に開催された総会で決定した。